

西洋と日本の近代化と自然認識の変容

この研究プロジェクトの立案者は一般教育教授、秋山紀子先生であった。秋山先生は環境問題の国際会議に数多く参加する中で、さまざまな自然認識のありかたに出会い、また一つの文化の中でも自然条件の変化に伴い自然認識が変容することに興味をもたれた。そして歴史に現れる自然環境の人為的改変や環境保護運動といった表立った動きの背後にある自然認識に目を向けられた。西欧でも日本でも近代化の過程において、自然環境は大きく変わり、それは既存の自然認識の枠組みを否応なく揺るがした。この中でさまざまな方向をもつ自然認識が提示され、それらを統合するかたちで、自然の認識の主流は確実に変化していった。この変容の比較研究をおこなおうというのがプロジェクト立ち上げの先生の創案であった。そこでは自然と人間の関係の歴史的展開を明らかにすると、関係論の視点も含まれていた。

先生は残念ながらプロジェクト1年目にして病に襲われ研究活動の中断を余儀なくされ、半年あまりの入院生活ののち、1995年8月27日にその疾走された生を閉じられた。この結果、先生が自分の課題として挙げられた西欧と日本の環境保護運動の違いと、両文化の自然認識の相違との関係について、見解を拝聴し、議論する楽しみが永遠に失われた。当初、自然認識の変容の研究は対象を歴史に求めるだけでなく、現実の運動も視野に入れたきわめて総合的な研究に発展させるつもりであったのに、秋山先生を失い、研究プロジェクトの規模は縮小せざるをえなくなった。われわれは方針の見直しをおこない、活動の継続を優先させ、自己の専門領域から標題のテーマについて考察し、それを互いに議論するかたちとした。

こうして中井章子研究員はノヴァーリスを例に1800年前後のドイツにおける自然認識の変容を、八耳俊文研究員は幕末から明治初期に中国経由で流入した自然神学的自然観の広がりについて、研究をすすめた。詳細は以下の各報告を見ていただきたい。ただ「近代」や「自然認識」でとらえられる概念そのものも研究の進展の中で絶えず問題となったことは特記しておきたい。

外部から三人の研究者を招いた。「西欧型環境倫理想の再考」を講演して下さった青森公立大学の鬼頭秀一氏、「オランダ科学と蘭学」を報告された東海大学の塚原東吾氏、「中国の自然思想と道教の身体論」を話して下さった東京大学大学院の欽偉剛氏である。秋山先生がおられなかったのに、われわれの研究の幅が少しでも広がったとするなら、それはこの三氏の刺激的で示唆に富む講演によるところが大きい。記して、ここに感謝の意を表したい。

(八耳俊文)

ヨーロッパの近代化過程と自然認識の変容

－1800年前後のドイツ自然思想についての試論－

中井 章子 (教養学科教授)

幕末明治初期に渡来した自然神学的自然観

－ホブソン『博物新編』を中心に－

八耳 俊文 (教養学科助教授)